

研究成果報告書

(国立情報学研究所の民間助成研究成果概要データベース・登録原稿)

研究テーマ (和文) AB		「不毛の潟湖」開発をめぐる歴史堆積層の断続－エジプトのイドゥク湖を事例に－			
研究テーマ (欧文) AZ		Study on the intermittent of historical layers of the development at the “barren lagoon area” : In the case of Lake Idku, Egypt			
研究氏 代 表 名 者	カタカナ CC	姓)ハセガワ	名)ソウ	研究期間 B	2015～ 2017年
	漢字 CB	長谷川	奏	報告年度 YR	2017 年
	ローマ字 CZ	HASEGAWA	SO	研究機関名	早稲田大学
研究代表者 CD 所属機関・職名		早稲田大学総合研究機構・客員上級研究員(研究院客員教授)			
概要 EA (600字～800字程度にまとめてください。)					
<p>研究対象の地域は、アレクサンドリアというヘレニズム政権の拠点都市の後背のウオーターフロントに位置する。前6000年紀の海進の影響に起因する強い塩基性土壌が残るために大きく灌漑が遅れ、従来の古典考古学では、当該地域は低地であるがゆえの生産性の低さのイメージから、主要な研究対象となつてこなかった。しかし、近年の欧米による研究の進展により、古代には活発な経済活動が営まれていたことが理解され始めている。その根源には、ナイル沃土地域のような集約的な農業に依存する経済システムではなく、パートタイム的な農業・漁業・狩猟・製造業・輸送業という脆弱な複数の生業を組み合わせた「生業複合」にあったことは確実と思われ、汽水湖独特の豊かな生物資源の多様に依存した経済活動がヘレニズム政権によってサポートされたことによって成立した歴史的な画期であったと考えられる。コム・アル＝ディバーウ遺跡は、上記の仮説を検証するための重要な事例である。研究班は、まず南丘陵の微地形測量を行った後に、機材探査・建築遺構調査・地表面分布遺物調査の3つを併行して行った。これらの調査によって、当該遺跡には、ヘレニズム時代(1-3AD)を中心とする集落(神殿周域住居)が形成され、日乾煉瓦家屋・倉庫・家畜小屋・広場・街路等から構成される村落構造が具体的に推測された。同集落が繁栄した時代には、遺跡の北と西側にはイドゥク湖の内湖が広がっていた一方、東側にはいくつかの砂丘列が分布し、砂丘列間の入り江は移動経路としても利用され、首都圏(アレクサンドリア)と結ぶ交流圏が織りなされていたと推測された。それが近代以降の開発の進行によって、砂丘の削平による果樹園造営と、湖水面を利用した養魚場の利用が進み、伝統的な生業は大きく失われつつある現況があるが、本研究成果は、汽水湖の生物多様性保全が地域再生の一つの手掛りになる点をも提示するものとなる。</p>					
キーワード FA	低地	砂丘	生物多様性	ヘレニズム時代集落	

(以下は記入しないでください。)

助成財団コード TA					研究課題番号 AA								
研究機関番号 AC					シート番号								

発表文献（この研究を発表した雑誌・図書について記入してください。）									
雑誌	論文標題 ^{GB}	「エジプト・地中海沿岸湖沼地帯のヘレニズム村落－経済活動の復元考察(1) 聞き取り調査－」第23回ヘレニズム～イスラーム考古学研究会							
	著者名 ^{GA}	長谷川奏	雑誌名 ^{GC}	『ヘレニズム～イスラーム考古学研究』					
	ページ ^{GF}	pp. 41～47	発行年 ^{GE}	2	0	1	6	巻号 ^{GD}	第23巻
雑誌	論文標題 ^{GB}	「エジプト・デルタ地域の砂丘集落調査における探査技術応用の有効性」日本オリエント学会第58回大会発表、慶応大学(2016/11/13)							
	著者名 ^{GA}	長谷川奏	雑誌名 ^{GC}	『オリエント』					
	ページ ^{GF}	3月末日刊行のため未定	発行年 ^{GE}	2	0	1	7	巻号 ^{GD}	第59巻第2号
雑誌	論文標題 ^{GB}	「エジプト西方デルタ・イドゥク湖南域の考古学調査(2016)－探査画像にみるヘレニズム集落の構造－」第24回西アジア発掘調査報告会発表、日本西アジア考古学会(2017/3/26)							
	著者名 ^{GA}	長谷川奏	雑誌名 ^{GC}	『西アジア発掘調査報告会報告集』					
	ページ ^{GF}	pp. 124～129	発行年 ^{GE}	2	0	1	7	巻号 ^{GD}	第24巻
図書	著者名 ^{HA}	長谷川奏							
	書名 ^{HC}	『環境に挑む歴史学』水島司編内論文「地中海、砂漠とナイルの水辺のはざままで－前身伝統と対峙した外来権力の試み－」pp. 308-322							
	出版者 ^{HB}	勉誠出版	発行年 ^{HD}	2	0	1	6	総ページ ^{HE}	416p.
図書	著者名 ^{HA}	So Hasegawa							
	書名 ^{HC}	Sate Égitto vol. 7 Appendix 2016(“Archaeological Research at the south of Lake Idku, West Delta, Egypt: 2016”)pp.1-14							
	出版者 ^{HB}	Research Office (Waseda Univ. Tokyo)	発行年 ^{HD}	2	0	1	7	総ページ ^{HE}	14p.

欧文概要^{EZ}

In the history of the classical archaeology of Alexandria, researchers have always paid attention to the study of the structure of the city of Alexandria itself, its hinterland area at Lake Mariyut. Then, we targeted the lowland area around Lake Idku, which has been neglected so far. In this area, a series of lagoons is distributed, as the area was covered by the sea advance during the period around 6,000-5,000 BC. As the intensive agriculture is not expected, a possible economic activity depending on the “Composite Livelihood”, in which kinds of weak occupations were linked, will be recovered through the study. Then, to proceed to the recovery of the ancient daily life of the area, we selected the sites of Kom al-Diba’. The top of the south hill is measured 9m higher than the foothill, and the area covers about 6ha. The north hill is smaller, and considering its historical environment, it was located in a remarkable position at Ghittas bay. As for the south hill, it is considered to be a settlement. With the geophysical research, we affirmed that the south hill of Kom al-Diba’ formed a village centering the Naos at the hilltop (temple precinct), which was built around the Ptolemaic period (4-1 Century BC) and flourished at the period between 1-3 Century AD or up to the Byzantine period (4-7 Century AD). Consequently, the hypothesis is shown here that the “barren lagoon area” had once been developed based on the lifestyle different from the area along the Nile, in the lost sand dune hills nowadays, which may inspire the discussion on the regional revitalization about the biodiversity at the brakish lake.